

文章の構成や展開を考えて、筋道の通った文章を書く力を育てる国語科学習指導の工夫 — 「構成の検討」過程における、児童の実態に応じた効果的なデジタル機器の活用を通して —

廿日市市立友和小学校 大江 靖子

研究の要約

本研究は、文章の構成や展開を考えて、筋道の通った文章を書く力を育てる国語科学習指導の工夫について考察したものである。文献研究から、「文章の構成や展開を考えて、筋道の通った文章を書く力」とは、事柄の順序や伝えたいことを明確にした構成に加え、相手に分かりやすく伝わるように、事実と感想・意見、理由と事例など情報と情報との関係のつながりや配列を意識し、自分の考えが明確に伝わるような順序で文章を書くことができる力とした。この力を習得させるために、自分の考えを支える情報を、共通点や相違点などで分類し、つながりを意識してから、構成や展開を考えさせた。さらに、結論をどこに置か、それによってどのような効果があるのか、つながりをもった情報をどのような順序で配列し、何段落で書くと分かりやすいのかなどについて、デジタル機器を活用して構成の検討を行わせた。文章の構成や展開を考えて、筋道の通った文章を書く力を育てるためには、構成の検討過程において、児童の実態に応じてデジタル機器を活用させ、情報と情報とのつながりや配列を意識しながら、構成や展開を二通り以上考えさせ、比較・検討させる指導は有効であると分かった。

I 主題設定の理由

中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年）では、「文の構成を理解したり表現の工夫を捉えたりすること」¹⁾に課題があると示されている。また、小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編（以下「29年解説」とする。）第3章第3節第5学年及び第6学年の内容2では、「伝えたいことを筋道の通った文章で伝えるために、文章全体の構成や展開を考えることに重点を置いている」²⁾とある。小学校学習指導要領（平成20年告示）解説国語編第3章第3節第5学年及び第6学年「B書くこと」では、『文章全体の構成の効果を考えて文章に書く能力』を育成することをねらいとしている³⁾とあり、「伝えたいことを筋道の通った文章で伝える」という記述は、「29年解説」に新たに記載されている。つまり、これからの国語科の指導では、自分のもつ情報を整理して文章で適切に表現するために、「書くこと」の指導において、文章の構成や展開を考えて、筋道の通った文章で表現する力を育成することが求められている。

しかし、所属校の6年生を対象に「目的や意図に応じ、文章全体の構成を考え、自分の考えをまとめる」力を問う問題を解かせたところ、意見文を書くことができた児童は56%で、そのうち文章構成シー

トを活用して自分の考えをまとめることができた児童は、14%であった。一方、意見文が書けなかった児童は、44%で、そのうち文章構成シートを活用できていた児童はいなかった。この結果から、筋道を立てて文章を書く前段階である、文章の構成や展開を考える段階に課題があることが明らかになった。

文章の構成や展開を考える中で、自分の考えを整理し、伝えたいことを筋道の通った文章で伝えることは、急速に情報化が進展する社会において、発信したい自分の考えを適切に表現し、伝える力につながると思え、本主題を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 文章の構成や展開を考えて、筋道の通った文章を書く力とは

(1) 文章の構成とは

「29年解説」では、「簡単な構成を考える際には、文章には『始め—中—終わり』などの構成があることを意識できるようにすることが重要」⁴⁾と書かれている。また、光村図書出版の第5学年教科書（令和2年度版）の巻末の「学習に用いる言葉」では、構成について「話や文章の全体が、どのようなまとまりで組み立てられているかということ」⁵⁾と書かれている。

これらのことから、構成とは、「始め—中—終わり」に代表されるように、文章がどのようなまとまりで組み立てられているかという、文章の組立て方のことであると考えられる。

(2) 文章の展開とは

「29年解説」では「文章全体の構成や展開には、例えば、基本的なものとして『序論—本論—結論』などが挙げられる。また、統括する内容を位置付ける箇所によって、『頭括型』、『尾括型』、『双括型』がある」⁶⁾と書かれている。高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説国語編では、「構成、展開とは、文章の組立て方と述べる順序とを指す」⁷⁾と書かれている。

また「29年解説」第2節国語科の内容3では、「書くこと」における「構成の検討」の指導事項⁴⁾を表1のように記述している。（下線は稿者による。）

表1 「29年解説」における「構成の検討」について		
第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
自分の思いや考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること。	書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えること。	筋道の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考えること。

上記の表1から分かるように、「展開」という言葉は第5学年及び第6学年の指導事項に含まれている。さらに「話や文章の構成や展開とは、『始め—中—終わり』、『序論—本論—結論』や頭括型、尾括型、双括型などの、話や文章の組立てや説明などにおける論の進め方のこと」⁸⁾であると書かれている。

よって、論の進め方について考えると、「『事実と感想、意見などとの関係』や『文章全体の構成』などを基に、目的に応じて、書き手は自分の考えをより適切に伝えるために、どのように論を進めているのか、どのような理由や事例を用いることで説得力を高めようとしているのかなどについて考えをもつこと」⁹⁾である。つまり、(1)より構成とは文章の組立て方のことであることから、展開とは、事実と感想・意見、理由と事例などとの関係のつながりを意識し、自分の考えが明確に伝わるような、順序であると言える。

(3) 筋道の通った文章とは

筋道とは、辞書では、「物事の道理。すじ」¹⁰⁾、筋が通るとは「事の首尾が一貫する。道理にかなっている」¹¹⁾と記述されている。また、「29年解説」では筋道の通った文章とは、「相手に分かりやすく伝わるように、伝えたいことや知らせたいことを明確にし、

首尾一貫した展開となるよう、論の進め方に注意して組み立てた文章のことである」¹²⁾と記述されている。つまり、筋道の通った文章とは、相手に分かりやすく伝わるように、事実と感想・意見、理由と事例など情報と情報との関係のつながりを意識し、自分の考えが明確に伝わるような順序で組み立てられた文章のことである。

(4) 文章の構成や展開を考えて、筋道の通った文章を書く力とは

「29年解説」では、「筋道の通った文章にするためには、第1学年及び第2学年で取り上げた『事柄の順序』に沿った構成や、第3学年及び第4学年で取り上げた『書く内容の中心を明確に』した構成を工夫することに加え、例えば、『考えと理由や事例』、『原因と結果』、『疑問と解決』などのつながりや配列を意識して文章全体の筋道を整えていくことが大切」¹³⁾であると書かれている。このことから、筋道の通った文章を書くためには、第1学年～第4学年で学習した構成に加え、つながりや配列を意識した展開を工夫することが必要であると分かる。よって、本研究では文章の構成や展開を考えて、筋道の通った文章を書く力とは、事柄の順序や伝えたいことを明確にした構成に加え、相手に分かりやすく伝わるように、事実と感想・意見、理由と事例など情報と情報との関係のつながりや配列を意識し、自分の考えが明確に伝わるような順序で書かれた文章を書く力のことである。

2 文章の構成や展開を考えるためのツール

(1) 構成の検討過程における思考過程

筋道の通った文章を書くまでの思考過程と過程の中で想定される児童のつまずきを図1に示す。

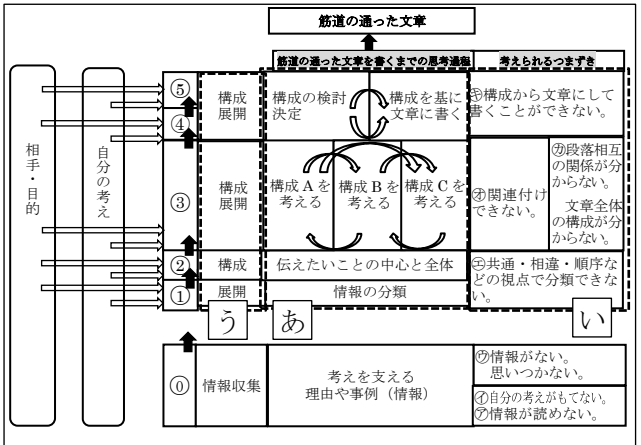


図1 筋道の通った文章を書くまでの思考過程とつまずきのイメージ図

筋道の通った文章を書くために、構成の検討において、5段階の思考過程をたどる(図1[あ])。その過程で考えられるつまずきを示したものが図1[い]である。図1の①は構成や展開を考える前段階として、自分の考えとそれを支える理由や事例(情報)を収集した状態である。次に、共通点や相違点、順序性などの視点でその情報を分類する(図1①)。そして、分類した情報の中で、自分が最も伝えたいことは何かを明確にし、それを伝えるためには、他にどんな情報を配列するのが良いかを考える(図1②)。その後、それらの伝えたいことをどんな順序で伝えるか、何段落にするのが良いか、結論はどこで述べるのが良いかと構成や展開を考える。この流れに沿って、第一案の構成Aを考える。それを基に、さらに良い構成や展開はないかと思ひ、第二案である構成Bを考える。そして、本当に他の構成や展開の仕方はないのかを思考し、構成A・Bを基に、第三案である構成Cを考えるという流れである(図1③)。この段階で構成や展開を複数考えることで、より適切な構成や展開について比較・検討することが可能となる。最後に、自分が比較・検討した三案のうちのどの構成や展開にするか決定し、その構成や展開に従って意見文を書く(図1④)。しかし、構成や展開が決まっても、意見文を書きながら、情報のつながりなど考え直し、構成や展開を修正する場合がある(図1⑤)。つまり、④と⑤の段階は、書き進めていくうちに、修正を繰り返す。こうした検討を重ね、筋道の通った文章に整えていく。図1[う]に示すように、構成や展開について繰り返し考えることで、自分が最も伝えたいことが伝わる構成や展開を基に筋道の通った文章を書くことが可能となる。

(2) これまでの文章構成シート

これまで活用してきた文章構成シートを図2に示す。

結論	本論③	本論②	本論①	序論	構成を考えよう

図2 これまでの文章構成シート

これまでは、教科書の説明文の構成を基本型とし、その説明文の構成を基に、自分の伝えたいことを整理し、短い文章や言葉で記入していた。段落の役割のみが示された、図2のようなシートでは、相手や目的を考えながら、自分の伝えたいことが伝わるように構成や展開を考えさせるというよりは、文章のそれぞれの段落の役割のみを意識した枠を示しているため、集めた情報を決められた場所に当てはめることで文章の構成が出来上がるように児童が捉えてしまうと考えられる。よって、児童は、どのような情報をどんな順序で構成すると説得力があるかということや構成や展開の違いで読み手の印象が変わることを比較・検討することなく、与えられた枠に当てはめるのみで構成を決定していた。そのため、文章構成シートの必要性を感じられていなかった。

(3) 「文章展開構成シート」の開発

今研究では、構成や展開を思考する際の思考を整理するためのツールとして、文章展開構成シートを開発することとする。文章展開構成シートとは、図2のような段落の枠を埋めて構成していくのではなく、自分の伝えたいことが明確に伝わる、筋道の通った文章が書けるように、構成や展開について自分の考えを段階を追って可視化しながら整理し、構成や展開について比較・検討できるものである。

まず、テーマに関する情報は、あらかじめ教師が用意しておき、付け加えたい情報は付け加えても良いこととする(図3[A])。それを基に、情報と情報とのつながりが分かるように分類し(図3[B])、どういう視点で分類したのか書き込めるようにする。

その後、その分類を基に結論の位置をどこに置くか、つながりをもった情報をどのような順序で配列し、何段落で書くと分かりやすいかを考えたり(図3[C])、それによって、どんな効果があるかを考え、その根拠を記述したりすることで整理していく(図3[D])。図3[D]では、自分が伝えたいことと、読み手を意識したことという視点からも、構成や展開を考え、特に意識した情報に○を付けていく。児童自身が構成や展開を何通りも検討した上で、なぜその構成に決定したのかの根拠も明確にし、自分の考えが最も伝わる構成や展開が決められるようにしていく。思考した過程を記録し、複数の案を比較・検討するために、これらの文章展開構成シートをタブレットを用いて、それぞれの段階で配信し、記録する。また、図3を拡大したものを別添資料1・2に示す。

制服と私服に関する情報		教師が用意した情報を提示																						
A ⑥ 毎日の服装に悩まなくて良い。 ⑦ きちんとした気分になる。 ⑧ 行事やクラス写真をとる時など一体感が出来る。 ⑨ 学校と家とのけじめがつく。 ⑩ 私服をたくさん買わなくて良いから経済的である。		⑪ 体調に合わせて、調節できる。 ⑫ 学校から帰っても、そのままの服でどこへでも出かけられる。 ⑬ 毎日洗えるので衛生的。 ⑭ 運動しやすい服そうなど、自分の必要に応じた格好が出来る。 ⑮ 雨にぬれても代わりの着替えが用意できる。																						
情報を分類しよう（学校には私服で来る方がよい）																								
B 私服の特徴 ① 運動しやすい服そうなど、自分の必要に応じた格好が出来る。 ② 制服に比べて、寒が着ることができる。 ③ おしゃれができる。 制服のデメリット ④ 制服の上着などは、毎日洗えない。 ⑤ 制服を買う必要が無いので、制服代はかからない。 ⑥ 制服のままでと遊びに出かけにくい時がある。 選ぶ条件 ⑦ 体調に合わせて、調節できる。 ⑧ 雨にぬれても、代わりの着替えが用意できる。 ⑨ 制服のスカートや半ズボンでは寒い時がある。 社会の常識 ⑩ 私服をもっていない人はいない。 ⑪ 学校から帰っても、そのままの服でどこへでも出かけられる。 ⑫ 毎日洗えるので衛生的。		どのような順序で伝えますか。どこに結論を書きますか。 このような理由で学校には、私服で来る方がよいと私は思いました。 ③ おしゃれができる。 ① 制服に比べて、寒が着ることができる。 ⑩ 私服をもっていない人はいない。 ⑫ 毎日洗えるので衛生的。 みなさんは私服と制服どちらで学校に行きたいですか。 私は、私服がよいと思います。																						
D <table border="1"> <thead> <tr> <th>結</th> <th>②</th> <th>③</th> <th>④</th> <th>⑤</th> <th>序</th> <th>構成</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>いから、その方から読みやす</td> <td>二回結論を言うこととで、ねんおし</td> <td>さる私ならではの良</td> <td>から。ことだから（共感</td> <td>常識として考える</td> <td>呼びかけ+結論</td> <td>理由、なぜその情報なのか、その位置に書くこと</td> </tr> <tr> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>この伝達と伝えたいを相手</td> </tr> </tbody> </table>				結	②	③	④	⑤	序	構成	いから、その方から読みやす	二回結論を言うこととで、ねんおし	さる私ならではの良	から。ことだから（共感	常識として考える	呼びかけ+結論	理由、なぜその情報なのか、その位置に書くこと		○					この伝達と伝えたいを相手
結	②	③	④	⑤	序	構成																		
いから、その方から読みやす	二回結論を言うこととで、ねんおし	さる私ならではの良	から。ことだから（共感	常識として考える	呼びかけ+結論	理由、なぜその情報なのか、その位置に書くこと																		
	○					この伝達と伝えたいを相手																		

図3 文章展開構成シート（記入例）

3 「構成の検討」過程における、児童の実態に応じた効果的なデジタル機器の活用について

(1) 児童の実態に応じるとは

上記のように、伝えたいことは一人一人違うため、児童の実態に応じた手立てをするために、デジタル機器を活用する。書けない児童の実態として、様々な要因が考えられる。中山卓（2020）は、「主張したいという思いの喚起」「整合性がとれず、論理的な意見文にならない」「説得力をもたせることの難しさ」¹⁴⁾と挙げている。これらから、児童の主張したいこと、周囲を説得したいことに応じて指導をしていく必要がある。そのためには、指導者が児童一人一人の主張したいことに応じて手立てをしていくことが必要である。構成の検討段階での考えられるつまずきとしては、考えがまとまらない、情報と情報とのつながりが分からない、文章に書き表せないといったことが考えられる（図1ⅴ）。そこで、児童の思考過程が分かるよう、デジタル機器を活用するこ

とで思考を可視化し、一人一人の実態に応じた手立てをすることが可能となる。

(2) デジタル機器の活用の有効性

書くことにおける手立ては、児童それぞれのつまずきが違うため、個別に行う必要がある。自分のペースで学習を進めるために、学習の仕方を理解させることも必要である。構成や展開を考える際に、情報を変えたり、順序を入れ替えたりすることを、ワークシートなどの紙を利用して行うことは、書く量が多いため、児童にとっても負担の大きい学習となる。しかし、デジタル機器を活用するとその負担が減ることから、児童の修正が多くなると言われている⁽²⁾。このことから、児童一人一人のつまずきに合わせた手立てを示すことで、学習の仕方が分かれば、負担が少なく学習を進められるようになる。また、説得力をもたせるために「始め—中—終わり」には、どのような展開が考えられるのか、また、「考えと理由や事例」といった情報と情報との関係に焦点を当てて展開を検討するといったことが考えられる。統括する内容の位置を変えたり、情報と情報との関係を捉え直したりすることが、画面上で行えるため、何度も試行錯誤でき、考えた複数の構成を画像保存し、比較・検討するといった学習活動も行うことができる。

Ⅲ 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

「書くこと」の学習で、「構成の検討」過程においてデジタル機器を活用し、文章の構成や展開を、情報と情報とのつながりや配列について意識しながら行えば、筋道の通った文章を書くことができるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表2に示す。

表2 検証の視点と方法

	検証の視点	方法
1	「構成の検討」過程における文章の構成や展開について考えることで、筋道の通った文章を書く力を育てることができたか。	事前アンケート 事後アンケート プレテスト ポストテスト
2	「構成の検討」過程でデジタル機器を活用して、構成や展開を考えることは有効であったか。	文章展開構成シート 作文の添削

Ⅳ 研究授業について

1 研究授業の内容

研究授業の内容を表3に示す。

表3 研究授業の内容

期間	令和3年6月10日～令和3年6月22日	
対象	所属校第6学年（26人）	
単元名	文章の構成や展開を考えて筋道の通った意見文を書く	
重点を置く指導事項	筋道の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考えることができる。（思考・判断・表現Bイ）	
言語活動	自分の考えが相手に伝わるように意見文の構成や展開を考えることで、筋道の通った文章を書く。	
次	時	学習活動
一	1	学習課題を設定し、学習計画を立てる。
二	2	構成や展開を工夫することでどんな効果があるのかを知る。
	3	構成や展開を考えると、どういうことかを知る。
三	4	友和小学校は、私服で登校しても良いというきまりにしたいという意見に対して、自分の考えをまとめる。
	5	構成展開シートを基に、私服がいいか、制服がいいかの意見文を書く。
	6	
	7	書いた意見文を Google Classroom に投稿し、共有する。

2 授業の実際と指導の工夫

(1) 個別に対応するための文章展開構成シート

構成や展開を考えて書く力を付けるためには、児童に構成や展開を工夫することで、どのような効果があるのかを実感させなければならない。そこで、「友和小学校は、私服で登校しても良いというきまりにしたい」という意見に対して自分の考えを述べるという言語活動を設定し、文章展開構成シートを活用し、「制服と私服のどちらがいいか」ということに関して、自分の考えをまとめていくこととした。自分の考えが伝わるように構成や展開を考え、図1で示したように構成Aから構成Cまで作成し、比較・検討することを通して、読み手にどのような印象を与えるか、自分の伝えたいことが伝わるかということを検討していき、構成や展開の違いで効果が変わることを実感させる。

(2) 検討の方法について

構成や展開を考えるためには、自分の考えとそれを支える理由や事例（情報）がなければならない。今回は、構成を検討する力を付ける単元であるため、理由や事例として考えられる情報はあらかじめ提示しておき、理由や事例を思いつくかどうかという時点でのつまづきが起こらないようにする。提示した情報は、児童が自分の考えに沿って分類し、筋道の通った文章が書けるようにすることを念頭に置き、構成する。例えば、制服の上着は毎日洗えない、私服は毎日洗えるという二つの情報を洗濯方法や使いやすさという視点で関連付けて分類するというのである。分類を最初に行うことで、情報と情報とのつ

ながりを意識して構成することができる。また、デジタル機器を活用することで、どのような構成や展開にすると自分の考えを筋道の通った文章で伝えられるのか、読み手にはどう伝わるのかということを考えながら、二通り以上の構成や展開を考え、検討を行う。

V 研究授業の分析と考察

1 文章の構成や展開を考えることで、筋道の通った文章を書く力を育てることができたか。

(1) 事前アンケートの分析

今回の授業の前に、アンケートを実施した。文章構成シートを以前の学習で使用したことはあったが、26人中16人の児童が文章構成シートの意味や使い方が分からないと答えていた。その他の児童も、原稿用紙に意見文を書く前に自分の伝えたいことを明確にし、筋道の通った文章を書くための手段だと考えている児童はいなかった。このことから、構成の指導は行っていたが、児童には、文章構成シートの意義が伝わってなかったことが分かる。

(2) プレテスト・ポストテストの概要

プレテストでは、「字をていねいに書くことの大切さ」について、ポストテストでは、「間食は食べた方が良いか」というテーマについて、文章の構成を考える問題を出題した。プレテストとポストテストの内容とループリックを表4に示す（プレテスト・ポストテストについては、別添資料3・4を参照）。文章の構成については、「始め—中—終わり」のどこに結論を置かかを考えさせた。また、自分の考えを支える情報をどのように並べ展開させるかを考えさせた。結論については、位置を決めるだけでなく、なぜその位置に書く事が効果的だと考えたかという理由が不十分であれば、この単元で付けたい力である構成や展開を考える力が付いたとは言えない。また、構成や展開を考える際、なぜその情報を選んだのか、また、情報と情報には、どのようなつながりがあり、自分の考えを支えているのかということについて、理由が書けていない児童は、展開を考えることができたとは言えない。

さらに、構成や展開を考えることができなかった児童については、どの段階でつまづいているのかを、個別指導や児童の記述、デジタル機器の分類などを基に把握し、構成や展開を考える力がどこまで身に付いているのかを見取る。

表4 プレテストとポストテストの内容とルーブリック

内容	評価	判断の基準
必要な情報を選んで構成する。	A	「始め-中-終わり」の情報のつながりや理由が明確で、読み手を具体的に想定し、その想定に応じた分かりやすい構成や展開を考えている。
	B	「始め-中-終わり」につながりや理由があり、読み手を意識した構成や展開を考えている。
	C	情報に関連性がなく、「始め-中-終わり」のつながりが無い。もしくは情報の組み立てができない。
展開を考える。	A	具体的に想定した読み手に、伝えたいことが分かりやすく伝わる構成となるように、結論の位置を考えている。
	B	読み手を意識し、自分が伝えたいことが伝わる構成となるように、結論の位置を考えている。
	C	結論とは何かが分かっていない。結論の位置に意図がない。

(3) プレテスト・ポストテストによる分析

ア 必要な情報を選んで構成する力に関わる分析

表5にプレテストとポストテストの結果を示す。

表5 プレテスト・ポストテストの結果 (n=26)

必要な情報を選んで構成する。	プレテスト	評価	ポストテスト			
			A	B	C	計 (人)
展開を考える。	プレテスト	A	2	1	0	3
		B	4	2	0	6
		C	5 (a)	4	7 (b)	16
		無記入	0	1	0	1
		計 (人)	11	8	7	26
展開を考える。	プレテスト	評価	ポストテスト			
			A	B	C	計 (人)
展開を考える。	プレテスト	A	4	0	0	4
		B	3 (a)	0	0	3
		C	7	5	6 (b)	18
		無記入	1	0	0	1
		計 (人)	15	5	6	26

プレテスト (一) から (四) では、「始め-中-終わり」の情報のつながりや理由が明確で、読み手を具体的に想定し、その想定に応じた分かりやすい構成や展開を考えた A 評価の児童は3人であった。C 評価や無記入の児童は17人で、なぜその位置にその情報を書こうと思ったのか、という問いに対して、「字を丁寧に書いた手紙をもらおうとうれしいから。」というようなその情報を選んだ理由を記述したり、「中と終わりの情報は入れ替わっても良い。」と考えたりしており、情報と情報とのつながりを考えて、

「始め-中-終わり」の構成や展開を考えてはいなかった。一方、ポストテストでは、11人の児童が、

「始め-中-終わり」の情報のつながりや理由が明確で、具体的に読み手を想定し、その想定に応じた分かりやすい構成や展開を考えることができた。C 評価の児童も、「気持ちのことは、読みやすいから最初を書く。」など読み手を意識したり、「間食を食べると疲れがとれる」「間食を食べないと、次の食事で食べ過ぎる」という、食べた時のメリットと、食べなかった時のデメリットを組み合わせたりして、つながりを意識して構成しようとしていた。しかし、文章全体で構成を見ると、一つの段落に情報を書きすぎてまとまりが分かりにくかったり、情報と情報とのつながりが見えなかったりした。A 評価の児童が増加した理由として、授業で、情報と情報とのつながりを意識して構成した文章とそうでない文章を読み比べ、どちらが読みやすく分かりやすいか、それはなぜかということを考えたり、情報を分類する際に、どういう意図で分類をしたのか、その中で自分の伝えたいことは何かを個別に聞き、意識化させた上で、構成の検討をしたりしたこと、問題を解く際に、授業で行ったことを想起して解いたと考えられる。

イ 結論の位置を考えて構成する力に関わる分析

プレテスト (五) では、具体的に想定した読み手に、伝えたいことが分かりやすく伝わる構成となるように、結論の位置を考えている児童は、4人だった。C 評価や無記入の児童は19人で、「結論は最後に書きたいから。」といった、これまでの経験から結論の位置を決めていたり、詳しい情報を結論だと捉えるなど、結論は何かということが分かっていなかったりした。一方ポストテストでは、具体的に想定した読み手に、伝えたいことが分かりやすく伝わる構成となるように、結論の位置を考えていたのは、15人と増加した。C 評価の児童は、結論の意味を間違えており、一番伝えたい情報を結論だと解釈していた。A 評価の児童が増加した理由として、授業で、文章の内容は同じだが、結論の位置を変えた文章を読み比べ、結論をどの位置に書くかで、読み手の印象が変わることを実感したり、今まで書いた意見文や既習の説明文から、読み手や目的によって結論の位置を変えていたことを想起したりしたためだと考えられる。さらに、デジタル機器を活用して、結論の位置をどこにするか、明確にしてから構成を考えたことから、問題を解く時にも、同じ手順で解いたと考えられる。

ウ プレテストからポストテストで評価が上昇した児童の分析

ここで、プレテストとポストテストで変容のあった児童 a についての構成・展開に関する記述を表 6 に示す。(下線部分は稿者が加筆)

表 6 児童 a のプレテスト・ポストテストの記述の一部

プレテスト	ポストテスト
始めに一番簡単なことを書いて、中には難しいことを書く。大切だと伝えるため <u>結論は終わりに書く。</u>	結論は二回言った方が伝わる。伝えたいことは中に書く。中にいいことが書いてあるともっと読みたくなる。

児童 a については、プレテストでは、「始め—中—終わり」につながりがなく、なぜ、その情報がその位置に必要なのかということは書いていない。しかし、ポストテストでは、双括型にして、中に一番伝えたい情報を書くことで読み手を引き付けようとしている。児童 a が授業でどのように思考し、構成や展開について考えることができるようになったか、表 7 に示す。

表 7 児童 a の授業での活動と内容

活動	内容
分類	⑦私服のデメリット、④制服の家でのメリット、⑤制服の学校や学校以外の場でのメリットという 3 グループに分類した。
展開を考える	一つ目の構成では、頭括型で制服がいいという意見を述べていた。二つ目の構成で双括型に変化した。
	一つ目の構成では四つの情報を中と終わりに書いていた。すべて⑦の情報で組み立てている。二つ目の構成では、終わりにあった情報を無くし、双括型にするために結論に変えている。情報は中に三つ置くこととし、情報の順序も入れ替えていた。

この児童は、一つ目の構成や展開を考える時、頭括型にしていたが、二つ目の構成を考える時に、双括型に変化した。その理由として「結論は、最初に伝えたいが、最後にも伝えた方が強調して伝えられるから。」と答えている。また、二つ目に考えた構成では、「制服の良さで一番分かってほしいこと(経済的であること)を最初に伝えるため。」情報を四つから一つ減らして三つにし、順序を並べ替えていた。残りの二つの情報は、読み手である 6 年 1 組を意識して、クラスの仲がいいこと、迷子になりそうな人が多いことというクラスの実態から、制服だと「行事やクラス写真を撮る時など一体感が出ること」「小学生であることが他の人にも分かってもらえるこ

と」を選んでいいる。つまり児童 a は、分類することによって自分の考えに一番近い表 7 の⑦の情報に整理することができた。一つ目の構成を考える時、表 7 の⑦からより伝えたいことをはっきりさせ、展開を考え、さらに二つ目の構成で、自分の伝えたいことと読み手である 6 年 1 組の実態とを考えた構成に検討し直すことができたと言える。いつも、意見文を書くのが苦手だと言っていたが、振り返りで、「デジタル機器を使って情報があって、分けたり並べたりすることができたから、分かりやすかった。文章を書く最初にいつも使いたい。」と振り返っている。児童 a にとって、情報を提示し、それらを分類してから自分の伝えたいことが伝わる構成を検討することにより、考えが整理しやすかったと思われる。図 1 いのつまずきのある児童に対して、文章展開構成シートは、筋道の通った文章を書く力を付けるために、構成の検討を指導する手立てとして有効だったと言える。

エ プレテストからポストテストで変容が見られなかった児童の分析

児童 b は、情報の分類はできるが、それらをどう展開するかを考える時に、整理ができず、自分の考えを分かりやすく伝えるために、まとまりを意識して構成することは難しかった。情報のつながりは意識できても、相手に分かりやすい構成や展開を考えることに課題があった。これまで、児童 b は意見文の課題を提出することはできていたが、それは教科書などのモデル文に合わせて文章を構成していたため、モデル文の言葉を自分の意見ではなく、課題に合わせてただ入れ替えることで書けていたのではないかと考えられる。今後の手立てとしては、結論を置く位置や構成の違いによる変化を事例を挙げながら丁寧に指導し、収集した情報を自分で整理させることで、構成を考える必要がある事を実感させる必要がある。

(4) 事後アンケートによる分析

事後アンケートを見ると、文章展開構成シートを使用した感想として、26 人中 21 人の児童が「計画して書けるので便利だった。」「情報をまとめてどの物を使うかなど整理することで、より、文章が書きやすかった。」といったような、意見文にする時に書きやすかったことを挙げていた。また、「頭括型、尾括型、双括型の長所や短所も分かった。段落に分けて書く事や、いかに読み手に伝わるかも考えられた。」と構成や展開を考えるために有効だったと感じている児童もいた。しかし、「情報が多く、ごちゃごちゃ

して難しかった。」「文章の構成や展開を考えることが難しかった。」という感想も見られた。これは、構成や展開を考えるために、情報を整理することに慣れておらず、文章を構成するイメージがつかみにくかったものと考えられる。

2 「構成の検討」過程において、児童の実態に応じたデジタル機器を活用することは、文章の構成や展開を考えて、筋道の通った文章を書く力を育てるために有効だったか

デジタル機器を活用することは、文章の構成や展開を考えて、筋道の通った文章を書く力を育むために、以下の点において有効であった。

(1) 比較・検討のしやすさ

構成や展開を考える際、多くのワークシートや付箋を用意しなくても、画面上で複数の構成や展開を考えることができた。結論の位置を変えたり、文章で使う情報を入れ替えたり、付け加えたりして、構成や展開を様々に考えることができていた。思いついたアイデアをすぐに可視化して検討できることに加え、訂正や変更に負担感がないことで、比較・検討がしやすかった。ある児童は、最初、学校には私服で来る方が良いという意見だったが、複数の構成や展開を考えているうち、意見を変えていた。どちらのパターンでも考えられ、それを比較し、検討する良さが生かされていた。

(2) 個別指導に生かす

考えたことを容易にメモすることができるので、児童が伝えたいことをどのように考えて分類したのか、また、構成を検討する段階では、構成の比較が容易にできるため、指導者が、児童と一緒になぜ構成を変化させたのかということを画面で確認し、児童の思考に沿って、個別指導を行うことができた。また、児童が文章に書き表すまでに、どの思考過程でつまづいているのかを把握し、その手立てを考える上で有効であった。さらに、前時までの考えをいつでも確認・共有でき、次の学習に生かすことができた。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

「構成の検討」過程において、児童の実態に応じてデジタル機器を効果的に活用することは、文章の構成や展開を考えて、筋道の通った文章を書く力を育てるために、有効であることが分かった。今回の

研究を通して、自分の伝えたい考えを明確に伝えるには、情報を分類すること、またそのつながりや配列を考えながら、自分の伝えたいことは何か、読み手には伝わるかということを考えながら構成を検討することで、さらに自分の伝えたいことが明確になり、より分かりやすく相手に伝えることができた。

また、デジタル機器を活用することで、児童のつまづきを把握し、児童の実態や思考に沿った指導の工夫をすることができた。

2 研究の課題

情報と情報とのつながりを考えるために、分類をさせたり、自分の伝えたいことが明確に伝わるように構成を考えさせたりしたが、文章を構成するという意味がよく分からなかった児童がいた。展開については、高学年からの指導であるが、中学年から展開を考える要素を学習し、その素地を培っているといえる。そのことを指導者自身が自覚し、系統立てて指導していく必要がある。また、児童自身が、構成や展開を考えて文章を書くことで、自分の伝えたいことが明確に伝わったと実感させる指導を行う必要がある。

【注】

- (1) 文部科学省（平成30年）：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説編国語』東洋館出版社 p. 64 に詳しい。
- (2) 細川太輔（2021）：『書くこと』の環境づくり・授業づくり』『教育科学 国語教育 861』明治図書 p. 12

【引用文献】

- 1) 中央教育審議会（平成28年）：『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』 p. 124
- 2) 文部科学省（平成30年）：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説編国語』東洋館出版社 p. 141
- 3) 文部科学省（平成20年）：『小学校学習指導要領（平成20年告示）解説国語編』東洋館出版社 p. 99
- 4) 文部科学省（平成30年）：前掲書 p. 65
- 5) 『国語 5 銀河』光村図書出版 p. 296
- 6) 文部科学省（平成30年）：前掲書 p. 141
- 7) 文部科学省（平成31年）：『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説編国語』東洋館出版社 p. 124
- 8) 文部科学省（平成30年）：前掲書 p. 121
- 9) 文部科学省（平成30年）：前掲書 p. 148
- 10) 松村明（1995）：『大辞林第二版』三省堂 p. 1342
- 11) 相賀徹夫（昭和59年）：『故事・俗語ことわざ大辞典』小学館 p. 620
- 12) 文部科学省（平成30年）：前掲書 p. 141
- 13) 文部科学省（平成30年）：前掲書 p. 141
- 14) 中山卓（2020）：「考えの形成を重視した意見文指導～事実と意見を繋ぐ論理的思考に着眼して～」『教育科学 国語教育 849』明治図書 p. 28